

心のケアと映画製作



NPO 法人地球のステージ代表理事
桑山 紀彦（くわやま のりひこ）

1996年、音楽と映像のコンサートステージ「地球のステージ」初演。
途上国の子どもたちの生きる力を伝えて4100回以上の公演回数を数える。
専門は心理社会的支援、トラウマ精神医学、難民心理学。精神科医、心療内科医、医学博士。海老名こころのクリニック院長。

映画「ふしぎな石～閑上の海」

今までどれほどの映画を制作してきたことでしょうか。もちろん心のケア、心理社会的支援（PSS）の一環としてどうトラウマに向き合うかをテーマにした映画制作です。始まりは東日本大震災でした。そこで2年にわたってトラウマに向き合うためのPSSを行った時、4人の被災した子どもたちが、「もっと映画をやりたい。」といってくれたのがきっかけで映画「ふしぎな石～閑上の海」を制作することができました。これは閑上で津波に遭った子どもたちが自分たちの小学校の庭でふしぎな暗号文が書かれた布を見つけ、その謎を解きながら被災地を駆け巡るという冒険活劇です。5つの石のかけらを集める中で5人の被災した大人たちに出会っていきいますが、そこから津波による心の傷（トラウマ）にどう向き合うかを学んでいきます。その中にいたのが閑上中学校遺族会代表の丹野祐子さんでした。彼女は目の前で息子さんを津波で流され、

後悔の日々を送ってきた実在の人物ですが、向き合うチカラを持ちずっと一緒に活動してきた仲間です。そんな彼女と4人の子どもたちが出逢うシーン。子どもたちはセリフを覚えましたが、丹野さんは、「私に任せて。」と完全にアドリブで臨みました。そして1発テイクで奇跡の「命のシーン」が完成したのです。いつ見てもそこは涙が止まらない本当にすごいシーンですが、実際の被災者がフィクションを演ずるといいう「向き合い方」が形成されていた瞬間でもありました。

映画「ふしぎな石～ガザの空」

そしてこの「ふしぎな石」は、なんとシリーズになって次はパレスチナ自治区、ガザ地区に飛びます。2003年から南部のラファ市に事務所を置き、PSSを続けてきた私たちはある日、「忘れられないあの日」に「血まみれのお母さん」作った子どもに出逢います。ファラッハ。当時11歳の小学生でした。彼女のお母さんは彼女が2歳の時に目の前で爆死し

ますが、彼女のこの壮絶な物語を基軸に「ふしぎな石～ガザの空」を作ることになりました。

夢の中に現れたお母さんに、小学校の木の下に埋まっている暗号文を読み解きながら進めば、自分のメッセージを伝えられると告げられます。そこから彼女は3人の友達と共にまた石のかけらを求めてガザ地区、ラファの街を駆け巡るという冒険活劇が展開していきます。今ではその全ての地区が破壊されガレキとなってしまった街ラファ。映画の制作は2015年ですからたった8年でロケ地は消滅したわけです。

5人の大人たちから戦争を生き抜く気持ちや人生観を学びながら、ついに5つのかけらが全て集まり石が光り出します。そこまでのステップは津波の被災地、宮城県閑上と全く同じです。お母さんからのメッセージを聴くラストシーンは、前もって録音しておいたお母さん役のスタッフの声をスピーカーで流しながら、初めてその内容に触れるようにしました。じっと聴き入るファラッハ。全てがアド



写真1 映画「ふしぎな石～閑上の海」天の声を聴く（出典：著者）



写真2 映画「ふしぎな石～閑上の海」丹野さんと出逢うシーン（出典：著者）

世界標準の心のケア

心理社会的支援（Psychosocial Support：PSS）とは現在国際協力の現場において標準とされる心のケアのモジュールです。私はこの手法をノルウェーのオスロ大学附属「心理社会的難民センター」で学びましたが、言葉に頼らず、トラウマに向き合うという誰にでも取り組める方法が特徴です。

心理社会的～Psychosocialという言葉は1979年、心理学者のErik Eriksonが論文に表し初めて世に出ましたが、その後Judith L. Harmanの「Trauma and Recovery：心的外傷と回復：中井久夫訳：みすず書房」というトラウマ・ケアの世界標準書を得てPSSにおけるトラウマ・ケアは完成されていきました。ハーマンはトラウマ・ケアに3つの段階を設定しています。第一段階は「安全の確保」～もう二度とそんなトラウマにさいなまれないという保証です。戦争被害者は難民となって隣国に逃げることで、地震被災者は余震が収まる頃に第一段階が完成します。

第二段階は「語り～自分らしいトラウマの物語を作る」という段階。ここでワ

ークショップが効果を発してきます。トラウマに向き合うために平たい紙を使う描画法という「2次元表現」から始めて、粘土細工を中心とする「3次元表現」を経て、集団制作のジオラマ制作、そして時間経過を必要とする「4次元表現」、音楽ワークショップ、映画ワークショップに向かいます。最初の頃は「自分らしいトラウマの物語を作る」というステップですが、後半は「他者のトラウマの物語を受け入れていく」というステップに入ります。他者のトラウマの物語を受け入れる、分かち合うことで自分のトラウマの物語を研ぎ澄まし、昇華させ、より語りやすいものにしていきます。ここで得られるのは自己肯定感です。

ハーマンはここまでで終了とせず、トラウマからの回復は「社会と再結合を果たすこと」が重要であると定義しています。そこまで到達して心は本当に回復していくのだと。それは自分の辛かったトラウマの体験を社会に還元し、「自分が役に立っている」という思いを得ることが重要だということです。ここで得られるのは自己有用感です。

このステップを経て人はトラウマからの回復、そして心的外傷後ストレス障がい（PTSD）の予防が可能になります。そこで大切なことはこれらのモジュールは決して「トラウマを乗り越える」ものではなく「トラウマと共に生きていく」ということだという大きな発見です。トラウマは心に付いた「傷」という刻印です。それは完全に消し去ることはできません。だからこそそれと共に生きていくという覚悟を得ることが重要なのです。消そうとしたり過去のものですることで逆に人は苦しみ続けます。どんなトラウマであっても自分の人生の一部として語り、表現し、伝えていけるようになることを目指す。それが世界標準の心のケアモデル、PSSなのです。

日本ではほとんど知られておらず、実用もされていません。しかしこれから日本でも盛んに取り組まれるようになっていくべきものだと思います。是非この機会に日本WHO協会がもたらす世界の知見を吸収して、日々の生活を変えていきましょう。

リブかつ一発テイクで撮影されました。クランクアップ後のインタビューでファラッハはこう語りました。「ずっと弱い気持ちの中で生きてきたけれど、今日天からのお母さんの声を聞いて本当に元気が出た。」

心の傷に向き合う事はとても大変だけれど、向き合えばちゃんと力になることをファラッハが教えてくれました。2023年3月、3年ぶりにファラッハに再会しました。19歳の美しい女性に成長し、パレスチナ大学の法学部に進んでいました。その理由を尋ねたら、「私の母は私が2歳の時に“血まみれで”亡くなりました。もうそんなことでなくなる人がなくなる世界のために私は法律を学び、世界の平和のためのNGOをガザ地区に作って活動したいと思っています。」

あの日、映画を通じてお母さんの死というトラウマに向き合えたことが大きな力になっていました。その時私は別件でTikTokに動画が掲載され「バズっ」て

いたのですが、ファラッハはその動画にコメントしていました。

「私はこの人に出逢って、人生が変わった。」

PSSはこうして長く人の成長や発展に寄与することができます。



写真3 映画「ふしぎな石～ガザの空」石が光る（出典：著者）



写真4 映画「ふしぎな石〜ラマラの大地」撮影中 (出典:著者)

映画「ふしぎな石〜ラマラの大地」

この映画「ふしぎな石」はその後、もう一つのパレスチナ、ヨルダン川西岸地区に飛びます。ついに映画は3部作となるのです。

ある日ジャラズン難民キャンプでPSSワークショップの一つ「写真言語法」をやっていました。1枚写真を選んでその中に写っているものを主人公にして物語を作るというものでした。そこにいたのがサディール、13歳でした。彼女はイスラエル軍の監視塔の写真を選んだ、こんな物語を作りました。

「私は軍の監視塔。先日5人のパレスチナ人の子どもたちが私に近づいてきたので、別の塔の兵士に命令した。その子たちを撃ち殺せ、と。」

そこでサディールは泣き出しました。すかさずうちのファシリテーターのマイが、「よく語ったね、もう十分だからね。」と保護しようとしていました。でもサディールは顔を上げて言いました。「私はもっとしゃべりたい。実はこれ、本当の話で、その5人の中にとっても中のいい従兄弟のジャーセムがいたの。今頭を打たれて入院中なんだ。」

サディールの強い意志を感じました。結局それから2週間後、ジャーセムは亡くなってしまいましたが、私たちはこの出来事を基軸に映画「ふしぎな石〜ラマラの大地」を制作しました。

サディールが2人の友達と共に4つの石のかげらを見つける冒険の旅に出ます。その過程でイスラエル軍の暴力行為と、すぐ隣に入植地があるという現実の

厳しさに触れていきます。しかし最後のジャーセムからのメッセージは、うちのパレスチナ人スタッフとサディールが考えたもので、「決して復讐はしない」という誓いでした。それは決して日本人の私が持ち込んだ価値観ではなく、パレスチナ人自身が考えたラストシーンでした。初めてドローンを使い崖の上に立つ3人の少女たちの向こうに、約束の地エルサレムを描きました。

こうして津波に始まった映画「ふしぎな石」はパレスチナでの2篇を加え3部作として完成していきました。

驚くのは出演した人々の演技の力です。ガザでは全てのセリフを子どもたちが覚えて臨みました。一つ一つの表情もとても深く、初めての映画出演とは思えません。その理由を問うと、現在ガザ地区に

おける「地球のステージ」の現地代表でジャーナリストもこなすモハメド・マンスールが言いました。

「生まれてからずっと困難ばかりだった。厳しい人生を歩んできた。だから心のひだが深くなり引き出しが増える。それこそが演技の力になる。」

寺山修司の「人は生まれながらに役者である」という言葉を想い出しました。苦労や困難、トラウマさえもが人の心を強くし、豊かにするのだと言いきるパレスチナ人に脱帽でした。

トラウマと共に生きていく

その後、PSSにおける映画ワークショップはウクライナ難民の住むルーマニアのガラツというところに飛びました。GNJP という日本の NGO のスーパーバイザーとしてその地における PSS を監督してきましたが、そこで短編映画をつくりました。それが映画「奇跡」(QRコードで視聴可能)。主演はガラツで子どもたちのワークショップを担当してきたファシリテーターのユリアとバレリアです。

この時みんなで制作したのは、戦争で亡くなってしまった大切な友人が天国に昇る前に逢いに来てくれるという内容でした。もしもまだ戦争のトラウマがじくじくした「膿み」の状態であれば、おそらく向き合うのは無理であろうと言えるくらい直接的にトラウマに触れるような内容の映画でした。しかし主演のユリアも助演のバレリアも揺れることなく最後まで演じきり、やはりトラウマによって失った想像力を取り戻すことは、誰にとっても重要なことなのだと改めて教えてもらいました。ラストシーンでついさっきまで会っていたバレリアが、実は3日前に空爆で亡くなっていたことを知ったときのユリアの慟哭は見事なもので、涙をためての迫真の演技でした。でもひ



写真5 映画「FRIENDS」南スーダン難民支援～映画撮影指導 (出典:著者)

としきり吐き出した後に見せるユリアの、「それでも私はこのトラウマと共に生きていく」

という決心の表情は、そこに一切のセリフも字幕もないけれど、十分伝わるものでした。強烈なラストシーンとなりました。こうして自分らしいトラウマの物語を完成させたユリアは、多くの人々のトラウマの物語に触れて、それらを内包し、映画という誰にでも伝わりやすい形式に自分のトラウマを昇華させていきました。(動画は文末のQRコードから視聴可能)

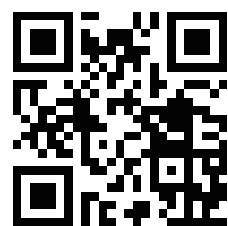
映画作りを通した PSS

私たちはこの手法でオデーサに事務所を置いて PSS を開始しています。今度にはウクライナ本国での映画作りです。

そして南スーダン難民を受け入れているウガンダ北部でも同様の PSS を展開して、多くの映画を制作しました。今は先の GNJP と組んで能登半島地震の被災者である七尾市の子どもたちと映画作りに取り組んでいます。津波から 14 年が

たち、地震から 1 年が過ぎた能登半島の子どもたちはどれほどトラウマに向き合い、映画に没頭してくれるでしょうか。

これまでの「心のケア」は単に「カウンセラーを増員」という心細いものばかりでした。でもこれからの「心のケア」は PSS という手法を使って目に見える、そして大きな転機が心の中に訪れるものが主流になっています。トラウマを忌み嫌うのではなく、消せない刻印と認めた上で「乗り越える」のではなく「共に生きていく」存在としてトラウマに向き合う事で、人は大きな転機を迎えていきます。世界では標準のこの PSS の手法が早く日本でも定着することを願っています。



映画「奇跡」のQRコード